

これからの作業療法士を育てる 臨床教育

特集にあたって

<教育側と臨床側、両者の視点から描くビジョン>

作業療法領域では、養成校指定規則やガイドラインの改正に伴い、臨床実習に関心が集まっている。「本校ではクリニカル・クラークシップ（CCS）方式による臨床実習を取り入れています」と言う理解者と、やや否定的な立場に分かれた時期から、一步も二歩も前進した印象をもつ。だからこそ、次を目指すための企画を立てた。

さて、ページをめくっていただくと、普段の体裁と異なる点に気づくだろうか。今回の特集は、身体・精神科・発達・地域の各領域とMTDLPを活用した臨床実習それぞれで、教育側と臨床側が協働で執筆している。“教育側と臨床側が相互理解の上に立ち、社会が必要とするこれからのOTを育てる臨床教育”について論じている。企画者たちには、これからこの職域に携わる人たちが、わが国の保健医療福祉教育において、人が自立し生活していくうえで欠かすことのできない作業の視点を十分に活かして活躍してほしい、そのための教育の進化が必要だという思いがある。

そのために、CCS、インストラクショナルデザイン（ID）、リフレクションといった教育理論を使って、教育側と臨床側がさまざまな工夫を取り入れた実践をしていく必要がある。対象者支援のための専門的知識と、臨床教育方法論と、そして対象者と学生が活かされる環境づくりの知見を、バランスよくもつ必要がある。ただし今回は、臨床実習を主として論じているため、言及は少ないかもしれないが、臨床教育は卒後教育へと続いていかないと意義は少ないだろう。

ここでイメージしているのは、自身の行為を見直しながら実践を通して知識と考えを磨き続ける反省的実践家としての教育実践者である。では、各論考で筆者たちと対話しながら、楽しんで読んでいただければと思う。

（小林幸治）

企画担当

小林幸治（目白大学、作業療法士）

澤 俊二（金城大学、作業療法士）

西出康晴（倉敷中央病院、作業療法士）